世界史学習における音楽教材の活用法とその課題

―ヨーロッパとアジアの比較を通じて―

厚木高校　大久保　敏朗

一　はじめに

音楽教材や視覚教材の活用は、その方法によっては生徒たちの授業に対する興味・関心を持たせるのに有効な手段となりうる。なぜならば、板書された歴史的事項をノートやプリントに書き写すといったとすれば受動的となりやすい作業とは違って、視覚や聴覚を駆使して能動的に考える瞬間をその場に作るからである。とくに音楽教材については、生徒と教師との間にある距離を一瞬にして縮め、授業の雰囲気を変える効果もあるように思える。三年前に第一次世界大戦後の西アジアに関する授業で、一九一〇年代前後に録音されたトルコの古典音楽奏者たちが演奏する「ロンガ（longa）」という曲を生徒に聴かせたことがある。この旋律は当時国内ではやっていた女子十二楽坊の「奇跡」という曲と同じであり、そのことがわかると、一瞬にして生徒たちの表情が生き生きとなったのを今でも記憶している。音楽がもたらす効果が授業の雰囲気を劇的に変えたことを実感した瞬間であった。音楽教材はその使い方によってはいろいろな効果をもたらすと考えられる。

一九八〇年代以降の研究についてみていくと、世界史授業における音楽教材の活用についてはたびたび実践報告が出されている。山本敬久が雑誌『歴史と地理』四〇八号（一九八九年八月、山川出版社）でヨーロッパ中世音楽からバロック音楽までを文化史の学習でどう扱うかについての視点での実践報告をしており、今林常美は、同四六八号（一九九四年八月）で授業活用のしかたに関する三つの類型と使用可能な音楽教材について、さらに鳥塚義和が、民族音楽・ポピュラー音楽も視野に入れた音楽教材の活用の実践例を同四八九号（一九九六年五月）で示している。また、雑誌『地理歴史教育』の「特集／音楽で学ぶ日本・世界」では浜（濱）田滋郎がクラシック音楽に関して、江波戸昭が民族音楽に関して、難波達興がアメリカ民謡に関して、世界史学習においてどのように活用できるかについてのその例を紹介している。特に浜田滋郎はクラシック音楽の歴史教育における活用だけを言及しているのではなく、民族音楽や大衆音楽の活用にも触れており、これらの音楽が「一般社会の生活とより密接に結びついて生まれたものであるだけに、歴史教育の場に活用する段にも、いっそう適切さが増す」とも述べている。また渡辺修司は近現代のクラシック音楽の作品を中心に世界史授業にどう結びつけることができるかについて論じている。また、宮腰一は視聴覚教材の活用例としてクラシック音楽以外にポピュラー音楽の授業での活用について触れている。

このように音楽教材に関する従来の研究をみると、その研究はクラシック音楽・ポピュラー音楽については欧米のものが圧倒的に多いことがわかる。これに対してアジアの音楽教材については鳥塚義和が触れているにとどまっている。世界史学習においてアジアに関する記述の占める割合が多いにも関わらず、音楽教材の活用に関する十分な研究は、され尽くしているとはいえない。また、このような研究の多くはあくまでも使える曲の整理だけにとどまり、具体的

に授業展開の中でどのように活用するのかについては十分に言及しているものは少ない。これでは、音楽教材の活用が、生徒にただ興味・関心を持たせるための、授業の導入として使うものばかりになってしまう。

そこで、今回このテーマを扱う上で、私は次の三つの問題意識をもってその検討にのぞみたい。まず一つに、現状としてヨーロッパとアジアそれぞれの地域の歴史学習において共通にある問題として、音楽教材の活用を困難にさせるものは何かである。そして、その中でも特にアジア学習に関する音楽教材の研究が少ないのはなぜなのか、またそれを困難にさせている要因は何かという点である。次に両地域の文化を理解させる上で授業の中で活用できる音楽教材はないのか、そして授業に活用できる場面はどこかということである。最後には、両地域の歴史を理解させる上で活用できる音楽教材は何があり、授業展開上どのように使うことができるかということである。今回の発表では、この三つの問題意識をもとに音楽教材の活用について、高校現場における教育実践を踏まえ、その可能性と課題について検討したい。

二　音楽教材を授業で活用する際の基準

地理教育においても音楽教材は対象とする地域のイメージをつかませる上で活用できる一つの方法として考えられている。例えばイギリスの地理教員に向けて書かれたディヴィッド・ランバードとディヴィッド・バルバーストンの共著による本の中では、音楽を流すことによって、「場所の感覚（sense of place）」を呼び起こし、イメージをつくる上では、効果的であるといっている。また、音楽教材のみならず音教材（サウンドスケープ）を使った研究についても山口幸男・清水幸男・寺尾隆雄・八田二三一・西木敏夫によって書かれた「地理教育と音教材」の中でその可能性が追求されている。確かに音教材についてもその活用の可能性を世界史教育の中で考える必要もあるだろう。しかし、ここではその音教材については除き、音楽教材に関してのみ扱うことにする。そこで、まず音楽教材を授業で活用する際に、自ら設けている基準に関して述べておきたい。

第一に、ヨーロッパ史では、時代を反映する同時代的なものを基本として使い、扱う歴史的事件・人物とそれに関する音楽が作曲された年代に開きがある場合は使用を避けている。第二に、音楽を授業で流す場合の時間の基本は一～二分程度にしている。第三に、ヨーロッパ以外の地域については同時代的な音楽が少ないため、民族音楽で、授業で扱う地域の音楽の特徴をあらわしているものを使っている。第四に、教材として使った音楽そのものの音楽史上での位置付けやその音楽の特徴についての説明は、生徒に対して必要と思われる場合でも簡潔に説明するにとどめている。最後に、なるべく歌を教材として使い、歌詞カードに原語と対訳がついている場合、それをプリントとして配布するということである。

なぜこのような基準を設けるかというと、まず生徒が音楽を聴くことに集中できる時間が短いため、器楽曲の場合は長い時間を流すことはできないということである。また、導入や展開時に音楽教材を使う場合は、音楽教材の選定を誤るとその後の授業の流れそのものに悪い影響を及ぼしかねない危険性がある。なお、歌詞がない音楽の場合はあくまでもその地域や時代のイメージ作りをさせるのが目的のため、実際の授業では授業プリント配布の際に流す場合が多

い。

三　歴史学習で音楽教材の活用の現状と活用を困難とさせる要因

もっとも理想的な音楽教材は歌詞を伴った曲で、その歌詞を使った授業展開が可能な教材である。山口修は「歌の中の植民地」の中で、「歌は文化を、歴史を、そして人々の心を映し出す鏡である」と言っている。とすれば、世界史学習で歌詞のついた曲を使うことは、ある国の歴史や文化を理解する上で有効な手段であるといえよう。日頃から私もなるべく声楽を伴った音楽を使うことにつとめ、実際一三〇曲近くの中、半分は声楽を伴った音楽を使っている。その音楽の演奏に関しては、楽譜の解読などにより再現されているものもあり、どのように歌われていた（朗読も含む）かについては、その演奏が正しいかどうかは疑わしいものもある。しかし、この問題を深く考えても不毛な論議となるであろうから、ここではメロディが再現されていることに意味を持たせるのではなく、歌詞そのものを使い、その内容から当時の世界をイメージさせることの方が重要である。この具体的な活用例についてはあとで述べたい。

特に古代に関しては、どのように歌われていた（朗読も含む）かについては、ほとんど再現不可能なため、関連する詩などを使って二〇世紀に作曲されたクラシック音楽の現代曲を活用する場合が多い。例えば、古代メソポタミアに関してはマルティヌーの「ギルガメッシュ叙事詩」という合唱作品を使い、ギルガメッシュという伝説上の人物を題材にしたギルガメッシュ叙事詩の内容に触れ、洪水伝説についてもとりあげるといいだろう。また、古代インドはグスタフ・ホルストの「リグ＝ヴェーダの賛歌」や「サヴィトリ」、「雲の使者」などの合唱曲を使うことができる。これらは、リグ＝ヴェーダ、叙事詩マハーバーラタ、カーリダーサの劇作品を題材に扱っている。したがって、これらは古代インドの文化の学習の時に活用できるだろう。このような音楽教材の活用によって、再現された音楽の少ない古代に関してもある程度カバーすることができるだろう。とはいえ、古代の歴史に関連する音楽教材についてはなかなかみあたらない。

私が授業の中で今まで使用した音楽教材は約一三〇曲以上あるが、古代に関してはヨーロッパ・アジアあわせて音楽教材に使っているものは、二〇曲しかない。ただ、幸いなことに両地域における使用教材のバランスとして考えた場合は、比較的バランスはとれ、曲数の差は少なく、ほぼ同じである。これに対して、中世から現代までの中では両地域の使用する曲の差は大きく、一一四曲中ヨーロッパは八五曲に対し、アジアは一六曲である。このような傾向は、市販されている世界史の音楽教材に関してもほぼ同じことがいえる。ここからわかるように、中世から現代では、ヨーロッパ史の学習で使う音楽（主にクラシック音楽）に対抗しうる音楽（主に民族音楽）の教材を、アジア史の学習で探すことができない。このような問題はいい教材を授業で使うという教師側の選択の幅を狭めている。

このことを踏まえ、なぜアジア史の学習で使う音楽の中に、なぜいい教材がないという疑問については、ヨーロッパとの比較で考えると次のことがいえる。まず一つは使う音楽で時代性を表すものが少ないということがあげられる。民族音楽の場合、歴史的な事件を扱ったものは少ないので、ヨーロッパ史の学習にみられる（例えば百年戦争や十字軍などの）歴史的事件に触れた曲の歌詞を活用し、

授業を展開するような方法は取りにくい。近現代では語り継がれている民謡やポピュラー音楽の中に、歴史的事件に関する歌などがある場合もあるが、膨大な作品の中でこれに該当する曲を見つけ出すことは難しく、情報を手に入れたとしてもその音楽CDなどを手に入れることは不可能な場合も多い。ここで決定的な障壁となっているのはことばである。民族音楽では歌詞のついてないものが多く、大意だけでは扱いにくい。ただ流すだけでは教材化として限界がある。第二に民族音楽の場合はその作品がいつ成立したのかという情報も少なく、また伝統的な音楽の伝授の方法がヨーロッパとは違い、楽譜を伴わないものである場合が多く、時代の中で曲そのものが変化していく可能性も高く、ある時代の社会・文化を反映したものとはならないことが多い。

以上のことから、アジアに関連する音楽教材は、あくまでも現代に残るその地域の社会・文化をイメージさせるためのものにとどまってしまう傾向がある。歴史授業の展開の中で生徒に考えさせる教材が、現状としてはなかなか見つけることができない。

四　文化を理解する上で活用できる音楽教材と展開方法

文化を理解する上で活用できる音楽教材として、ヨーロッパの歴史に関連するものとしてここでは古代ギリシア・ローマのところではカール・オルフの作品をあげておきたい。彼の作品は現代曲で、古代ギリシア・ローマにあった音楽を再現したものではないが、彼が作品のテキストとして使っている詩の方を重要したい。「アフロディーテの勝利」は、ギリシアの女流詩人サッフォーの詩の断片などが使われている。文化史学習で、人名と作品名を結びつけて覚えさせるだけではなく、ここではその作品に直接触れることができる。授業では、古代ギリシアの代表的な詩人をふれる場面で活用することが考えられる。また古代ローマでは「カトゥリ・カルミナ」を使うことができる。サッフォーの影響を受けた叙情詩人カトゥリはクローディアに恋し、結局は失恋する。この詩から古代の人々の心性に触れることができる。しかも彼の父がカエサルに気に入られた人物であったことから、カエサルの時代の説明のところで、当時の貴族の世界をイメージさせるものとして活用できるのではないかと考える。

次に一四世紀の時代のイタリア音楽をあげたい。イタリア・ルネサンスの授業では、「サンタレッロ第四番」という器楽曲を使うことがある。この曲は、一四世紀イタリアで流行した曲である。この曲は授業の導入として時代説明をする前に活用することが可能であるし、授業の途中で一通りルネサンスに関係する人名と業績を整理する間もしくは一通り整理したあとで、具体的な例としてペトラルカやボッカチオの人物と作品についてふれ、当時の状況（ペストの流行など）を含めて説明する時に流すのも効果的である。この曲などを流すことによるねらいは、生徒がこの時代の音楽に興味を示すだけでなく、それ以上にこの時代がどのような時代であったかについて関心を移すことができるかにあるだろう。

次にあげるのが、フリードリヒ二世のフルート協奏曲である。啓蒙専制君主として活躍した彼に関するエピソードで、彼が音楽を愛好していたことは知られている。資料集では彼がフルートを吹いている絵画もあることから、授業の中ではフルート協奏曲第二番第一楽章の導入部を流し、彼が愛好していた楽器は何であったかという

ことをクイズ形式にしながら考えさせ、人物に関する興味・関心を持たせるということは可能であろう。もちろん、ここでのねらいは啓蒙専制君主というものが持っていた政治家としての側面以外の部分である。他の地域の啓蒙専制君主にも共通する部分は何かを理解させるためのきっかけとして、このような教材を使うことも可能であると考える。

アジアに関しては音楽教材の一定の限界を感じつつも、その中で利用できる教材は何かを考えると、その一つに東南アジアにおけるバリ島の民族音楽ケチャがあげられる。ケチャについてはCDが数多くあるので手に入れることは比較的容易である。ここで生徒に理解させるのは東南アジアの島嶼部におけるインド文化の影響をいう点になる。つまり、ここで問題となるのは音楽そのものではなく、音楽を使って演じようとする「ラーマーヤナ」の世界である。インドで生まれた叙事詩「ラーマーヤナ」が東南アジアの島嶼部で演じられていることは、この地域の文化的土壌の歴史的な形成過程との関連がみられる。授業展開の中で、この地域がインド文化を受容した歴史的過程を説明する時に、生徒にイメージを持たせるには適切な教材である。この時ケチャの様子を伝える映像などがあるとさらに効果的であろう。東南アジア地域の全体の文化的特徴を学習する授業の導入として、音楽教材を使って生徒に興味・関心を持たせる方法として効果的であろう。もしくは文化的土壌の歴史的形成を王朝の変遷の中でみる時のインド・ヒンドゥー文化の受容のところか全部を整理しまとめの段階で、文化的特徴を復習する際に使うのが効果的であろう。

もう一つ例をあげる。モンゴル帝国成立もしくは発展の授業で、馬頭琴の伴奏によって歌われる曲を流す方法が考えられる。この場合、モンゴル草原の写真や映像をあわせて使うことがより効果的であろう。導入として音楽を流し、モンゴルの風土のイメージをもたせ、どのようにしてこのような草原地帯からモンゴルによる征服が始まり、巨大なモンゴル帝国形成へと至ったかということを生徒に問いかけ、興味・関心を持たせる方法が授業展開上まず考えられる。そうでなければ、ユーラシア地域における帝国の拡大へと授業が展開する前にこの音楽を流し、モンゴル支配が他地域に及ぼした文化的な影響などにも触れ、モンゴルの中国支配にまで話をすすめていく場合にも、活用できるのではないかと考える。

五　歴史を理解する上で活用できる音楽教材と展開方法

歴史を理解する上で使用できる音楽教材については、古代史では授業の展開の中で、出エジプトという歴史的事件のところで、「旧約聖書の音楽」を使用している。この「旧約聖書の音楽」はあくまでも学者が楽譜を解読し、解釈したものであるため、実際に音楽としてそのとおりであったかについては慎重に扱う必要があるだろう。しかし、旧約聖書がコーレヘートたちによまれることで語りつがれていったことを考えると、そのイメージをつかませるという点では、この音楽を活用する意味は十分あるかとかんがえられる。テキスト自体が旧約聖書からとっていることからも、文字としての利用価値も十分にあると思われる。

ヨーロッパではまずイタリア人作曲家カルロ・ヴェラルディの「ばんざい、カトリックの王と女王（Viva el gran Re Don Fernando con la Reina Don Isabella）」をあげておく。音楽の活用

方法としては、導入で使い今回はスペイン王国の成立とレコンキスタに関する授業であることを生徒に意識させ、動機づけさせるために活用する方法も考えられるであろうが、スペイン王国の成立のところで活用する方が、より効果的である。詩の内容を黙読させ、これが何の歴史的事件に関して歌ったものかを思考・判断させるために使うことができるだろう。そこでスペイン王国の成立という歴史的事件とイベリア半島において当時展開されていたレコンキスタとの関連を、ヨーロッパの人々がどのように結びつけたかについて生徒に考察させることができるのではないだろうか。

次にアジアにおける学習で活用できる教材としては、鳥塚義和があげている「鳥よ鳥よ　青い鳥よ（……）」のみを例として紹介しておきたい。これは甲午農民戦争・日清戦争の授業で活用できる音楽である。使う方法としては導入でまず今日の授業内容を話し、それに関連した歌をこれから流すということを口頭で説明し、韓国語と日本語を併記した歌詞をのせたプリントを配布する際に音楽を流し、生徒に聴かせる。

その時にこの歌詞の中にある「緑豆」と「青い鳥」と「青舗売り」ということばに注目させ、このことばの意味は何だろうかという問いかけをするとよい。次に本時の学習内容である甲午農民戦争・日清戦争の経過と結果を板書するとともに説明を加える。次に再び「鳥よ鳥よ　青い鳥よ」の歌詞を再び見るように指示し、「緑豆」と「青い鳥」と「青舗売り」のことばの意味するものは何かを生徒に考えさせ、指名し、答えさせる。その際にすべてを考えさせるのは難しいので、「緑豆」が全琫準であるというヒントを与えれば、その歌詞の内容から類推することができるであろう。授業の最後で、その後の朝鮮半島がどうなっていくのかの概略を話し、本時の学習内容をまとめる際に再び音楽を流すとさらに効果的である。このようにアジア史では、列強による帝国主義政策が展開される一八七〇年代以降の歴史を扱う場合には、音楽教材は単に当時のその地域の文化的イメージをつかませるにとどまらない効果的な教材になりうる。

六　文化および歴史的事件を理解する上で活用できる音楽教材

文化および歴史的事件を理解する上で活用できる音楽教材として、最後に一八四八年の二月革命・三月革命に関する音楽教材をあげておく。ここであげる歴史的事件とは、ウィーンの三月革命である。教科書では、政治史的な側面しか触れられないが、それ以上に民衆の反応についても触れておくことが必要であろう。カッツェンムジーク（Katzenmusik）とよばれるシャリヴァリが行われ、都市でパン屋などを襲う暴動がおきた。その中で民衆が要求したものは何か、なぜかれらがそれを要求したのかについては、考えさせたいところである。このようなシャリヴァリと三月革命の時期の民衆の暴動に関しては良知力が『青きドナウの乱痴気』の中で触れている。世界史の授業の中で社会史的な視点を生徒に提示することは、必要ではないかと考えられる。その点では、絶好の機会であろう。実際の授業でとりあげた時に生徒も興味を示していた。

授業では三月革命の概要を説明し、ウィーン体制が崩壊したことに触れる。その時に都市では暴動が起きたことについても説明する。それからその時にカッツェンムジークが行われたことを話し、良知力コレクションの中の銅版画「学生たちのシャリヴァリ」を生徒に

みせ、シャリヴァリの音楽を流す。この時に学生たちが制裁を加えようとしている相手は誰なのかを考えさせ、答えさせる。そして、当時の革命ビラ「大きな猫ばやしと大きなパン、もしくは愉快なレオポルトシュタットの住人より」を読ませ、彼らが制裁を加えようとしている相手がどういった人物であるかを読みとらせる。そして、シャリヴァリとよばれる慣習がなぜ暴動とつながっていくのか、なぜ民衆がパン屋などを襲撃したのか、どこに対立する原因があるのかについて生徒たちに考えさせるには有効な教材であるであろう。シャリヴァリとは中世からヨーロッパでみられた共同体の中でルールを逸脱した（再婚など）ものに対する制裁行動であった。ヨーロッパでは一九世紀になるとこのシャリヴァリが政治色を持ったものへと変容し、蔵持不三也が指摘する「闘争シャリヴァリ」が増えていく。ドイツにおいても三月革命期には食糧不足から始まった穀物価格やパンの価格の高騰が民衆の生活を圧迫させていた。このことが都市における暴動の発生につながり、一部はシャリヴァリという形をとったことについて触れることは、当時の社会的背景をつかむことで、より深く歴史を理解する上で必要ではないだろうか。

シャリヴァリそのものは単なる地域社会におけるルールに基づく制裁という点では考えるのではなく、地域社会内の対立を考えるべきであることが近年の研究では指摘されているが、ここでは、このような問題にまで掘り下げない配慮が必要である。むしろ、生徒たちにその時代の状況をわかりやすくイメージさせることが必要である。「カッツェンムジーク」というタイトルを持った作品は現代曲にもみられるが、シャリヴァリそのもののイメージをつかむためには、必ずしも適切とはいえないだろう。中世のシャリヴァリを再現したCDとしては、クレマンシック・コンソートが演奏する「フォーヴェル物語」（HMA 190994）がある。この中におさめられている「シャリヴァリ」の音楽を流しながら、おおまかな音のイメージを持たせることがここでは必要である。

七　最後に

音楽教材の有効な活用法について、数例をあげて説明してきたが、ここで私が強調したいことはヨーロッパとアジアの音楽を比較した場合、教材化の観点からすれば、厳しい課題が数多くあるということである。特に私が今までの教育実践の中で強く感じたのは、東アジアの歴史授業の中で活用する音楽が少ないという点である。このことは克服したいことではあるが、手に入る情報も少なく、その手段についても知らないのが現状である。音楽教材を使った授業は生徒たちには好評で、授業の感想では必ず何人かの生徒はこの音楽教材についての印象を述べてくれるのだが、より生徒が歴史に興味を持って授業に臨むようになるためには教師の絶え間ない教材の工夫が必要であろう。そして、音楽教材はただ単に導入などで使うだけの教材にとどまらない可能性があり、当時の時代の人々の考え方などをその歌詞から汲み取ることができる。理解するのにいくつかの説明を必要とする史料を扱い授業を展開することはまた違った授業展開の可能性を音楽教材も持っている。

観点別評価については、その評価の基準や方法について現在各高校でも試行錯誤を繰り返し、考えなければならない段階にある。このような状況の中、「思考・判断」や「技能・表現」などの各観点にあたる部分の評価をどのようにすべきかについても検討しなけれ

ばいけないであろう。その際に史料や地図、図版、音楽などを授業の中でどのように活かしたらいいかについて、そしてどう観点別評価につなげていくかについてはそれぞれの教師の工夫・努力が必要であろう。これからもさまざまな教材に関してその活用の可能性については検討していく余地はあるだろう。

《主要参考文献》

上尾信也『歴史としての音～ヨーロッパ中近世の音のコスモロジー』柏書房、一九九三

アルノ＝ヘルツィヒ（矢野久・矢野裕美訳）『パンなき民と「血の法廷」　ドイツの社会的抗議一七九〇～一八七〇年』同文館出版一九九三

伊藤俊一「歴史教育における視聴覚教材の活用とマルチメディア」『名城大学教職課程部人間科学研究』　一九九四

今林常美「欧米近現代史とクラッシック音楽―世界史教育における文化史教材の一例」『歴史と地理　世界史の研究一六〇』山川出版社　一九九四

江波戸昭『世界の音　民族の音』青土社　一九九二年

江波戸昭「アフリカの思想を伝える民族音楽」～歴史教育者協議会編『歴史地理教育　第四〇七号』、　一九八七

大江志乃夫『岩波講座　近代日本と植民地　7　文化の中の植民地』岩波出版、一九九三

蔵持不三也『シャリヴァリ―民衆文化の修辞学』同文館出版　一九九一

柘植元一・植村幸生編『アジア音楽史』　音楽之友社、一九九六

鳥塚義和「世界近現代史の授業で使える音楽教材」『歴史と地理　世界史の研究　一六七』　山川出版社　一九九六

難波達興「アメリカ史学習で使える民謡教材」歴史教育者協議会編『歴史地理教育　第四〇七号』、　一九八七

浜田滋郎「歴史教育と音楽」～歴史教育者協議会編『歴史地理教育　第四〇七号』、　一九八七

朴燦鎬『韓国歌謡史　一八九五―一九四五』晶文社　一九八七

宮腰一「視聴覚教材の探し方・使い方（その2）」～歴史教育者協議会『あたらしい歴史教育　第七巻　授業をつくる』大月書店一九九四

山口幸男・清水幸男・寺尾隆雄・八田二三一・西木敏夫「地理教育と音教材」『新地理　五一―二』　二〇〇三

山本敬久「音楽でたどるヨーロッパの歴史―音楽を中心とした文化史学習一」『歴史と地理　世界史の研究　一四〇』山川出版社一九八九

渡辺修司「世界史教育における『音』の利用～歴史的イメージと感性の形成をめざして」『東京学芸大学付属高等学校研究紀要三三』　一九九三

良知　力『青きドナウの乱痴気～ウィーン一八四八年』平凡社　一九八五

David Lambert and David Balderstone 'Learning to Teach Geography in the Secondary School— A Companion to School Experience' London ; New York : Routledge, 2000